
おじさん、女子にチョコをもらう

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おじさん、女子にチョコをもらう

【Nコード】

N8998Q

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

四十歳過ぎのおじさんと二十歳前の女子のバレンタイン・デートの風景。それ以上、何も申し上げることはありません。

(前書き)

おじさんの、おじさんによる、おじさんのための、妄想バレンタイン・デイ。

妄想するぐらいは自由にさせてくれ！

「おじさーん」

私の背後から微かな声が聞こえた。その声はうら若い女性の声だ。いや、女性というより女の子、いやいや、女の子というよりも女子と言った方が当てはまるだろう。

「おじさーん」

その声は、加速度的に音量が大きくなり、足音も聞こえてきた。私が周りを見回したが、この付近に”おじさん”と呼ばれるような人物が見当たらず、どうやら”おじさん”は私のようで、もう一度私を呼んだようだ。

「おじさんってば！」

もう間近の、およそ私の三メートル後ろに、その女子が迫って来ているようだった。だから、この声の持ち主が誰であるかを私は知っている上で、私は否応無しに振り向くしかなかった。

「もお！ さっきから呼んでるのにい！」

その女子は、私の目の前でチェックのミニスカートから覗いている自分の膝に手を置いて「ハアハア」と、グレーのブレザーを着た肩を揺らして息を整えながら、そう私に訴えた。

「僕のことを呼んでいたなんて思わなかったんだよ」

私はあえて知らばつくれた言い方で、その女子の若さゆえの行動をけん制した。

すると、その女子は膝に置いていた手を振り上げて、スツと背筋を伸ばして立ち上がり、首を傾げながらお茶目な目付きで私をにらんだ。

「もおー。おじさんって、いつもそうー。毎回、毎回、白々しいんだからあ」

そう言い終わった女子は、私に微笑みかけながら私の腕にしがみ付いた。

「おい、君イ。困るよあ」

腕にしがみ付かれた私は、ホントは全然嬉しいにも係わらず、表面的、建前的にそうした反応をしてしまうのであった。

女子は、私の言葉に不満らしく、右手の人差指を立ててそれを左右に振って言った。

「ち、ち、ち。『君イ』は止めてよあ、『君イ』は。『佐和子』だから『さっちゃん』って、いつも通りに呼んでよ」

私は、諦めが早い方だ。さっさと順応する方が得策だということ は心得ていたし、いつも通りにしたいのはやまやまだったのだ。

「分かったよ、さっちゃん」

私がそう言うのと、佐和子は右手でオーケーサインを出した。

「いつも通りになったわね」

そう言うのと、佐和子は私の腕から離れてくれた。

「そうそう。ねえ、おじさん。今日は何の日か、知ってるわよね？」

そう私に尋ねる佐和子に、私はニヤリと笑って間髪を入れずに答えた。

「バレンタイン」

佐和子は、私の前に回ってニツコリと満面の笑みでこう言った。

「大正解」

そう答えた佐和子は、バッグからピンクの大きなリボンが付いた赤い包装紙の箱を私に差し出した。

「はい、どうぞ。『アイ、ラブ、おじさん』でえーす。」

私は少し照れながら、ちよつと臆病な手付きで、佐和子が差し出したバレンタインのチョコレートを受け取った。

「いいのかい？ 彼氏の分じゃないのかい？」

佐和子はプツと吹いた。

「何を言ってるのよ。あたしの彼氏は『おじさん』じゃない」

私は猛烈に赤面していることを自覚していたのだが、佐和子はそれを茶化した。

「あ、おじさんの顔、真っ赤よ。照れてるの？ 可愛いわあ」

佐和子は、私の横に並んで私と腕を組んだ。

「あたし、世界で一番、おじさんのことが好きよ」

私は、更に頭に血が上がり、顔が赤くなつて、手が汗ばみ、首筋に生暖かい汗が流れているのを実感した。

「四十歳を過ぎて今まだ独身だけど、こんな気持ちを体験できるとは思つてもいなかったよ」

私はそう言つて、佐和子の顔を見た。すると佐和子はウツトリとした目で私を見つめていた。

「あたし、おじさんのそういう、純なところが好きなんだ」

佐和子は更にギュツと私の腕にしがみ付いて言つた。

「じゃあ、今日は何処へ行く？」

佐和子はウルウルとした目で私に訊いてきた。

「クレープ屋」

私は、精一杯の笑顔で佐和子に向けて私は言つた。

「また『納豆』じゃないでしょうね？」

佐和子がイタズラっぽく訊いた。

「今日は、チョコをタツプリだぞぉ！」

私は右手を高らかに突き出した。

「おーし、あたしもっ！」

佐和子も左手を天高く突き出した。

私と佐和子はシツカリと腕を組んで、寄り添いながら小走りでクレープ屋へ急いだのであつた。

（後書き）

……はあ、はあ、はあ。

妄想で突っ走ったら息が切れました。

おじさんの身勝手妄想なので、どうかご容赦くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8998q/>

おじさん、女子にチョコをもらう

2011年4月13日01時50分発行